

「日本文化史」の諸問題 ——文化研究の新たな場へ——

石塚 純一

はじめに

いま、日本の歴史・文化にかかるさまざまな学問分野で、これまでの常識や「通説」が見直されはじめている。たとえば日本各地で進んでいる考古学の発掘調査と研究によつて、われわれの教科書的な縄文文化イメージは根底から変わりつつある。縄文時代が狩猟採集の自足的な閉じられた社会ではなかつたという認識は、たんに過去をどう理解するかという問題にとどまらず、縄文から弥生時代へ（狩猟採集社会から農耕社会へ）、古墳時代へと、近代にむかつて段階的に歴史や文化が進歩・発展してきたという、現代人の歴史意識を揺るがすほどのインパクトを内包している。後述するように歴史学の分野でもこうした歴史認識の見直しが進行している。通説が疑われ自明なことこそが問題となれば、その学問を成り立たせている基盤が問わされることになろう。

もう一つ別の角度からの見直しもある。日本の学問が明治以降、西洋の圧倒的な影響下に成立した事実とその功

罪の検討、学問領域を限定している枠組に対する批判、ひいては専門分化が進んだ結果としてのひずみの指摘など、「制度」としての学問を歴史的・文化的問題として検討しようという動きである。

この小論では、こうした動向のいくつかを検討し、その問題提起の重要性をふまえつつ、それでは文化研究のためにどのような「場」を構想すべきなのか、どのような方法が有効なのかを考えてみたい。文化研究という広い問題域のうち、日本文化史の研究を批判的にありかえり、その新しい可能性について検討しようと思う。

学問の領域、枠組を解体すること

近代の学問が専門分野を確定することによって精緻な議論を可能にし、いくつものすぐれた成果を生んだことは間違いない。しかし一方で、専門領域の確立とは、概念規定を繰り返し、規範的な言説に基づいて学問体系を整備し、領域の内と外を決め、自らをオーソライズしつつ教科書などで定説化し、「日本史」「日本文学史」など通史叙述のスタイルを再生産していく過程でもあった。^{*1}

研究者が学問の内部にあって、その世界で通用する言葉で語りながらそこから脱出することはなかなか困難である。「既定の事実、既定の枠組みの範囲を越えた、複合的な視点に立つて行なうこと」がいかに困難なことであるか。一つの思い込みが、いかに他のことを見えなくさせてしまるものであるか。ある事実のある側面からの認識が、同時に別の側面からの認識をも妨げない、そんな柔軟な態度をもつてすることがいかに困難か」と、大西廣が述べるよう^{*2}に、枠組を越えるということは個人にあっても力を要する難行であり、ましてや異なる専門家が寄り集まつて行う学際研究がたいていの場合、専門の足し算の合計のような結果しか生まれない理由になつている。

しかし、この困難の克服が真に求められている。既成の価値観に疑問を抱きはじめた私たちにとつて必要なのは新しい価値ではなく、「事物を見慣れないものにする」新しい方法、見慣れたものを違う文脈から見ることによって得た思いがけないかたちの発見、つまり自らがおこなう思考の手掛けりなのだ。したがつて、その困難さを自覚した研究者の役割は重要である。積み重ねられた研究のうち本当にすぐれたもの、エキサイティングな方法は、他の専門領域（少なくとも隣の専門家）の認識を搖るがすことができるはずで、そのような研究こそ読者あるいは受け手の常識や認識を異化し、疑い、考え始め発見するきっかけとなる。

領域を越え、異なる世界をつなぐ媒介者の一つが「出版編集」である。対象の面白さ、不思議さの発見にとつて、また「意味」の考察とそれを伝えようとする行為には「他者」が必要かもしれない。たとえば編集者の役割をそこにあることができる。また、放つておくと制度化しようとするとする学問を、常に対象化するアカデミズム批判の空間も文化研究にとつては必須である。

「文化史」がいまなぜ問題となり、どのように問題にしたらよいのか、いくつかの視点から具体的にさぐつて見よう。

一、学問の基盤を問い合わせなおす試み

「美術史」の自己認識

自らの学問の基盤とその現在を問う試みは、例えば一九九七年一二月に行われた美術史学の国際シンポジウムに見ることができる。「今、日本の美術史学をふりかえる」と題して、日本・東洋美術史という学問の成立と展開過程、

その言説を問題にした研究集会が三日間にわたって開かれ、私もそのコーディネーターの一人として参加した。^{*3} こうした試みが、アメリカにおけるニュー・アート・ヒストリーや、英國でのカルチュラル・スタディーズの影響下にあることは確かだが、決してそれだけの動機ではなく、学問の根柢と領域的枠組についての批判をふまえた個別の研究や出版物が少しづつ発表され、若手や中堅研究者の間で問題意識が共有されはじめていることの表れといえる。本稿の意図にそくして簡単に紹介しておこう。

第一セッションのテーマは「学問の制度」であった。明治期に美術史学が西洋から移入され、「美術」という用語や概念が創出されたが、それとともにそれまで古物や什器、屏風や掛け幅といった生活調度だったものが美術品、工芸作品とされ、信仰対象としての「ほとけ」が彫刻作品として全国的に調査され、国宝として格づけされ国家的制度に組み入れられていく。^{*4} 西欧に対して、日本が独自の「美術」を有することを宣言するために、天平彫刻をギリシア彫刻に対比するような時代区分論をふまえた日本美術史の概論が、岡倉天心や九鬼隆一によつて創出された。^{*5} それは、日本にも古典古代が存在したことを誇示する論（仏像のアルカイックスマイルや寺院建築のエンタシスといた説明はいまでも教科書に生きている神話である）に象徴されるように、中世（鎌倉・室町時代）を宗教の時代、それ以前を古代（奈良・平安時代）、以後を近世（桃山時代の美術をルネサンスに見立てる）とする西洋の文化史観にならつた「日本美術史」の確立であった。日本美術史学の成立は、日本の近代国民国家の形成と軌を一にするものであり、現在にいたるまで学問の制度的枠組は変わつていないという問題提起であった。

第二セッションでは、日清戦争後における日本帝国の形成とインド、中国の没落によつて日本美術が東洋美術を代表するという認識が成立し、中国美術が日本の研究者によつて西洋のまなざしで「発見」されてゆく過程、つまり

り「内なる他者」としての東洋＝オリエンタリズムについて議論された。^{*6}

第三セッションは、日本美術史の「言説」がテーマだった。「国宝」級の作品と代表的作家を辿つて綴られる「尾根づたいの日本美術史」に対する批判、そのような美術史が成立する陰で無視されてきたモノや人は何だったのか。さらに「叙述」を問題にする場合、近代における美術史の起源を批判すれば済むのか、前近代における書画論（幕末国学派の言動など）の近代への影響や、中世以来の目利きや鑑定の「伝統」が現在の美術史に落としている影＝内実まで問題にしなければならないという議論がオーセッショングに引き続いておこなわれた。また、美術史の叙述におけるメインストリームがどのように形成されたのか（主な研究対象と排除されたもの、言葉や概念の再検討）、数多く出版された美術全集は日本美術のはじまりをどこに求めたか、縄文とするのか旧石器時代とするか、その根拠を問うとともに美術全集の編集の仕方の問題にまで議論は向かつた。^{*7}

このシンポジウムで注目すべき点は、研究者が自ら携わる学問のレトリック（修辞法）を問うていることと、学問がとり結んできた諸関係を問題にしていることである。美術史は過去をどのように語ってきたのか、自らをどのような学問としてきたのかを反省し、「過去の作品や作家」対「研究者」という閉じられた世界ではなく、その関係を成り立たせているものすべてを問題にすることであつた。「美術史」というアカデミック・グループだけではつくり得ない新たな歴史への要求、そういう「場」づくりへの期待がシンポジウムの根底にあつたといえるだろう。それは延べ六九〇人におよぶ参加者の顔ぶれにも表れている。日本美術、西洋美術の専門家だけではなく、日本史や文学、人類学、教育学の研究者、編集者、学生などの幅広い参加がみられた。

文化の新しい歴史学の模索

問題は美術史に限らない。歴史学においても、従来の研究に対する批判をふくむ変化がさまざまなかたちで見られる。その最も大きな潮流は、一九七〇年代から八〇年代にかけて盛んになつた「社会史」と、その流れの中から八〇年代末に顯著になつた「文化史」の動向である。フランス、アメリカ、イギリス、日本でも社会史からの問題提起が注目を集めてすでに久しい。フランスにおけるアナール学派やM・フーコーの一連の仕事^{*9}、アメリカにおけるナタリー・Z・デーヴィスの宗教改革やフランスの民衆文化についての革新的な仕事^{*10}、ロシアにおけるA・グレーヴィチの中世文化への視角^{*11}、イギリスにおけるE・P・トムソンによる産業革命研究の転換^{*12}が多くの示唆を与える。社会史についてはすでに多くの評価や批判がなされており、ここであらためて言及するまでもないが、二宮宏之が言うように、社会史は政治史、経済史といったジャンルをあらわす概念ではなく、従来の歴史学に対するアンチ・テーゼとして提起されており、それは「自己限定的な概念ではなく、はみ出していく概念」であるという主張^{*13}はその現在的意味を明確にするだろう。

近年における歴史研究の変容の一端を、アナール学派の問題意識を総括的に示した『歴史・文化・表象』（岩波書店）によつて見てみよう。

R・シャルチエは、長年にわたつて歴史研究を支配してきた「歴史認識の原則」に対し、新しい歴史学は距離をもつようになつたといつう。従来の原則とは、①包括史を企てることによつて、社会のさまざまな次元をひとまとめに関連付けることが可能だとする認識。②研究対象を空間的に限定し、都市あるいは地域といった特定空間に根づ

いた社会を描写し、それを集積することによって全体史に奉仕する。③社会的階層を優先的に区分することによつて文化の差異や分割の原因を捉える思考法だという。

これらに対し、アナール学派など革新的な歴史学は、社会総体の描写を断念する。人間の営みに、経済的、政治的、社会的、文化的といった階層秩序を設げず、技術とか経済といった決定要因のどれかひとつに絶対的な優越権を与えない。大小さまざまな事件などトピックや、特定の切り口から社会をつくる結合や対立のからみあいにもぐりこみ探究する。日常的行為も社会構造もすべて表象^{リプレゼンテーション}によつて作り出されているとし、表象を通じて個人や集団は世界に意味を与え、世界を自らのものとしていると考え、その表象に注目する。ただし、このような歴史研究における視点の移動は、旧来の伝統からの開放を促すが、まだそれ自体で新しいシステムを作り出してはいなといいう。^{*13}

また、G・デュビーは、因果関連という考え方が従来さまざまな形で歴史認識の基礎となり、実証主義歴史学においても時間的前後関係のうちに直線的な因果関係が想定されていたが、「いまや歴史家たちは諸現象の絡み合いのなかから生まれるある種のまとまりの方を問題にする。因果関係よりは、相互関連を注意深く見分けていこうとしている」と述べる。さらに歴史の方向を決定づけるのは、経済的なファクターだけでなく、心的な現象もそれと同等の重みを持つといい、

大切なのは、人々に広く認められ意識されている認識のしくみ、イメージや心的表象の体系、さまざまなシンボルの総体——それらは人々の行動のしかたや世界のなかでの自己認識のありかたを統御しているものなのですが——を、はつきりさせていくことです。文字資料にせよ、非文字資料にせよ具体的な資料のなかに、こ

のような表象体系や心性の痕跡、またその変容の痕跡を見つけ出すことです。

と、歴史研究の対象や方法の革新について提言している。^{*14}

J・ルゴフも新しい文化の歴史について、文学作品も歴史研究の対象として捉えることを主張する。「それぞれの社会が文学作品を通じてどのように自己を表現しようとしているかを、それを生み出した人々と、それを読んだであろう人々との社会史的関連において読みとる」必要性について、また、書かれたものでない資料、考古学的資料や語られた言葉にも歴史学は注目すべきだという。考古学的資料については、歴史的大建造物や美術的価値の高いものを重視するのではなく、日常生活のありようを示す資料（都市や村落、耕地の跡、生活用具など）に注目して過去の全体的な生活の再現に向かうべきだと述べる。そしてこれらの資料を単に一点一点としてではなく一つの系列として捉える。個々ばらばらに捉えた場合にはほとんど変化が認められないようなものでも、長い系列に整理することによって変化の相が見えてくると述べる。^{*15}

アナール学派ではないが、アメリカの歴史家N・Z・デーヴィスは、最近の山口昌男との対談で、自らの研究戦略の変化について、歴史における「非合理」のプロセスの検討という研究の方向性の転換のきっかけとなつたモチーフは、お祭り騒ぎ（シャリヴァリ）だったと述べている。「階層志向のイデオロギーと抵抗が重視される社会史から、意味がより中心の場を占め、「非合理なもの」と文化としての祭りが重視される文化史の観点」への移行を語つている。^{*16}

このような歴史学の革新、変容はけつして外国の学界事情ではなく、私たちがいま模索し、考察すべき「文化の歴史学」への重要な示唆と受け止めなければならない。

日本における状況

日本においても八〇年代には、歴史研究を中心的に文学史、美術史、民俗学、考古学における境界的で刺激的な仕事がつぎつぎにあらわれ、上記のような翻訳出版も刺激となつて、研究者、読者を巻き込んだ一つのムーブメントがおこつた。日本史における網野善彦や笠松宏至らの中世の言葉を手掛かりに過去を異質なものとして描いた仕事^{*17}、石井進らと考古学のジョイントによつて生みだされた「モノとトポス」の歴史考古学の出版^{*18}、黒田日出男らの絵巻や屏風絵を読み解く仕事^{*19}、網野、大西廣、佐竹昭広による説話・物語とイメージの水脈を探るシリーズ^{*20}、『社会史研究』・『列島の文化史』の季刊雑誌の創刊^{*21}、『日本の社会史』全8巻^{*22}といつた仕事がつぎつぎと生み出された。なかでも網野善彦は多くの日本論が前提としている「常識」を根本から疑い、批判する問題提起を現在も続けている。日本史像の再検討を迫る最近の試みに『アジアのなかの日本』全六巻などがあるが、九〇年代後半になつてかつてのムーブメントは一段落しつつある。

問題は提出され、旧来の歴史研究からの脱却は行われつつあるが、歴史理解の新しい方向は未だ見えず、不確実性を生む結果となつてゐるといえよう。歴史、文学、美術、宗教、民俗、人類学といった領域の壁が見直され、あるいは正しく意識され、相互に乗り入れられる結果としての対象の拡大、視点の移動、歴史「叙述」への意識化、文化としての「学問」の相対化、「テクスト—書物—読み手」の全体的視野といった課題を前にして、つぎにどこへ進むのか。

文化研究を構想する「場」が求められる状況がここにあるといえる。問題は「日本および文化そして歴史」である。

「歴史」はもはや均質、平板な因果連関の通史を意味していない。よく知られた事実や事件や作品が「異化」され、文化の裂け目(時代・地域・テーマのあいだ)にあることががらがクローズアップされ、無視されてきたものが現れる。このような研究＝書物への期待は高まっている。現在はまだ明確になつていなかが、新しい「文化史」がそれを可能にするだろうと私は考える。

しかし、一方で私たちはすでに「日本文化史」というジャンルをもつており、多数の書物が出版されている。従来の日本文化史は「文化」をどのようにとらえてきたのか、それとの比較検討は、私たちの「文化史」認識を鮮明にするだろう。日本文化史研究の歴史を大雑把にふりかえりながら考えていく。

一、日本文化史研究をふりかえる——出版史の視点から

日本文化史とは考えてみると不思議な学問である。日本史や日本文学、仏教史や美術史などはそれぞれ独立した分野としてのまとまりがあり、学会もあり、研究者はそれぞれ○○学専攻を名のるが、日本文化史を標ぼうする大規模な学会は存在しないし、文化史家を自称する人は少数にとどまるだろう。それはこの学問の定義と対象領域が定まらないまま、かなり自由気ままに論じられてきたことを表している。それは必ずしも悪いことではなく、面白いことだと私は思う。この学問が対象とする分野を融通無碍にとりこみ、枠組みから比較的の自由であり続けてきたからである。しかし、その反面、後に述べるように戦後歴史学からは「うさん臭い」「あぶない」学問とされ^{*23}、美術史や文学史のような個別専門史学からは曖昧な学問とみられてきた。それでも日本文化史は連綿と書き継がれ、多くの読者を得てきた。戦前における最高峰の文化史といわれた西田直一郎の『日本文化史序説』や、第二次大戦

直後に刊行された辻善之助の『日本文化史』全七巻、戦後歴史学の思想を体現した家永三郎『日本文化史』などは幾度も版を重ねている。

日本文化史を謳わざともその内容において文化史であるもの（例えば津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』など）、また日本文化の特質を論じる文化論の類いを含めれば数えきれぬほどの本が出版されている。本稿では、文化史の方法を論じたもの、通史的・概論的ななされた叙述（東山文化論のような個別の時代文化を論じたものははぶく）の内から主要なものを選んで考察する。

戦前の日本文化史

日本における広い意味での文化史研究は明治前期の、福沢諭吉『文明論之概略』（一八七五年、明治八）や田口卯吉『日本開化小史』（一八七七年、明治一〇）にはじまる。当時、歴史研究は文明開化史と呼ばれ、両著は西洋のギズー、バッカルの文化史の方法を学び、人類の歴史世界を自然法則的に把握しようとするとともで、古きを批判し新しい精神を提唱する啓蒙的な歴史学の始まりだった。

これらの文明開化史の後、文化史研究が再び要求されたのは明治末年から大正にかけてのことだった。生松敬三によれば、文化という概念が哲学の問題としてはじめて研究対象になつたのは大正期であるといふ。^{*24} 西田直二郎は日本における文化史研究の発端について、明治末期から大正期にかけて強まつた文化史研究と、明治一〇年代の福沢諭吉や田口卯吉らの文明開化期の文明史研究とを比較し、その隆盛には似たものがあるがそれらの間には「甚深な相違」があるという。開化期のそれは自然法則探究の学問（生活における自然の征服、利用過程を文化とする）

としての文化史であり、近時の研究こそ人間主義に基づく文化史研究の発端であり、「自然に服属している文化の姿を觀んとするのではない。人間自我の發展はかの文明史とこの文化史の上に大なる相違を十分認めしむる」と述べる。この西田の發言（『日本文化史序説』）自体、一九二四（大正一二）年の講義録にもとづくもので、先の津田左右吉『文学に現はれたる我が國民思想の研究』（一九一六、大正五年）、大燈閣版の論集『日本文化史』全二卷（一九二二、大正一一年）、内藤湖南『日本文化史研究』（一九二四、大正一三年）などこの時期は文化史研究の一つのピークであった。

しかし、日本文化史の出版史的な隆盛は、昭和一〇年代以降、第二次大戦にむかう時期だった。長沼賢海『日本文化史の研究』（一九三七年、教育研究会）、西田直一郎・辻善之助・龍肅らによる『日本文化史大系』全一二卷（一九三七年、誠文堂新光社）、村岡典嗣『日本文化史概説』（一九三八年、岩波書店）、和辻哲郎『日本精神史研究』（一九四〇年、岩波書店）などを挙げることができる。この時期、日本浪漫派によつて国学的古代観が再生され、日本精神の昂揚と結びついた各種の日本論が発表されるとともに、上記のような文化史研究も数多く出版された。その最末期に位置するのが国体觀に貫かれた文部省編の『日本文化大観^{*25}』（一卷のうち一卷のみ刊行、一九四二年）であつた。

戦後歴史学と日本文化史

戦後の歴史学は戦前の學問姿勢の否定から始まつた。戦前と戦後の比較は、日本文化史という學問の性格を考える上でひとつ手掛かりになる。戦後歴史学が戦前の文化史を批判する主な論点は、まず、専門の学者が皇室の起

源の「悠久」さや、古代人の思想を科学的検討なしに教育者や国民に語つたこと^{*26}。戦前に到達した文化史は、政治史を中心とする一般史に対し批判的意味をもつ特殊史のひとつだったが、その立場をのりこえて、歴史学の王座に君臨することを主張した。その結果、あらゆる文化現象を人間の精神活動の所産であるとし、文化史の名が精神史へとおきかえられてしまつたとする批判^{*27}。歴史学は社会経済史学であるべく、文化史はブルジョワ史学として否定すべきだというマルクス主義史学からの批判に要約できるだろう。

戦後歴史学からの批判のターゲットとなつたのは、西田直一郎の『日本文化史序説』だった。戦後の文化史研究にも影響を及ぼしたその内容を見てみよう。本書は二部構成からなり、第一部では歴史学と文学史の関係、文化史の方法と性格、西欧における文化史研究の発達と日本における文化史的歴史叙述を検討する。第二部では「日本文化化の展開」として古代から明治まで歴史を叙述しながら、それぞれの時代の理念というべきものを抽出しようと試みる。その歴史哲学は、歴史を「自らを省みる意識の発生」と考え、人間主義的、精神史的観点から文化史を構想する。

歴史事象を時代精神に還元する、西田の精神主義的な方法に対する戦後の歴史学からの批判はたしかに当たつている。だが西田は、文化史を美術史や文学史などの特殊史の総合として捉えず、個々の事実や事象は根底において関連し合い全体と関わるとし、この関係の意味の歴史が文化史だという。この見方は傾聴すべき面をもつていて、たとえば何を文化としてとりあげどのようにとらえるのか、「貞永式目」に注目した次のような一節を見よう。

貞永式目は条文の解釈によって終わるのでなく、時代の政治、経済、社会生活の諸観点、また文章として文學觀点に於てさえこれを考へ得る。これとともに重要なことは法制は精神生活に於て強い意志の表出とのみ觀

らるべきでなく、感情、意欲、諸情操によつて織り成されたものを有つてゐる。而して政治史、法制史、社会史たるとともに、またこれ等が相互に相関係する歴史現象たる外に尚ほさらに文化史としてあるべき根底的なものがある。

この記述は、オ一部の文化史の意義について語つた部分だが、オ二部の「日本文化の展開」の鎌倉時代の叙述では、貞永式目について、武士の道義觀念と幕府法制の關係を述べるにとどまり、右の文化史の方法が生かされているとはいひ難い。そのような不徹底さがあるが、「法」をも文化史的に捉えようとする立場は独自なものであつた。戦後の西田批判が、學問の民主化という時代狀況の中で性急になされたことは理解できるが、その精神主義の問題を内容の検討においてのり越える作業は十分になされてこなかつたようだ。

熊倉功夫は、戦時下の精神史的文化史の登場について次のように述べてゐる。戦前の文化史研究が文化価値を極限概念として規定せず、主觀的な心情を対象に投影し、文化価値との混亂をまねいたことが、戦時下における精神史を生み、文化史学にたいする不信感を植えつけたと。つづいて、それでは戦後の文化史学が文化価値を規定できなかつたこと、いまだに喪失したままであり、むしろ文化価値の客觀化を避け、文化を生み出した環境に注目し、文化の担い手を明らかにすることによつて文化の機能論を開拓してきたといふ。^{*28}

この指摘はたしかに当たつており、戦後の文化史はとりあげるべき対象や、叙述の基本的スタイルにおいて戦前と変わらぬ次元にあり、戦後価値観として文化環境論や上部構造論を打ち出したにすぎない。文化をどのように問題にするかという問い合わせには必ずしも正面から答えていない。

戦後の日本文化史の言説と社会史の登場

もう一度、戦後歴史学の文脈にもどって文化史の出版を追うと、一九五六～五八年、敗戦後一〇年にして『図説日本文化史大系』全一二巻（小学館）が刊行される。一〇〇人を越す筆者（実証主義とマルクス主義史学の混成）による、多数の写真・図版を盛り込んだ歴史全集である。文化史に対する先の批判がまだづく状況の中で、文化史の意味を厳密に問い合わせ直して編集された企画とはいえたが、戦後の出版史の出発点に位置する大シリーズとして成功をおさめた。このシリーズの刊行で「文化史アレルギー」は、なしくずし的に薄められていった。

その背景には二つの動きがあった。一つは戦後歴史学が社会経済史的傾向に偏重していたことへの批判で、人間を描くこと、人間が作り出す文化への理解を重視しようという動きである。もう一つは、サンフランシスコ講和条約（一九五〇）前後の時期に、日本のおかれた国際政治上の従属的立場に対して、民族の独立を守り民族文化の自主性を主張する国民的運動が展開されたこと。そのきっかけは民族問題を論じたスターリンの「言語学におけるマルクス主義について」をめぐる議論だったが、歴史学界においてもそれを受けて日本の民族文化を積極的に評価する動きがおこり、文化史へのあらたな関心を生んだといえる。

これ以後、家永三郎『日本文化史』（一九五九年、岩波書店）をはじめとして一九六〇年代には、日本史研究会編『講座日本文化史』全八巻（一九六一～六二年、三一書房）、林屋辰三郎『日本歴史と文化』全二巻（一九六六～六七、平凡社）、石田一良編『日本文化史概論』（一九六八年、吉川弘文館）など戦後を代表する日本文化史が刊行された。家永三郎の『日本文化史』は、岩波新書の一冊として出され、広範な読者を得て（八一年に第2版を刊行）、日

本文化史のスタンダード的な位置を今も占めている。その立場は、戦前の「日本精神」主義に立つ日本文化尊重論を批判し、新しい文化史は「過去の日本文化の発達の経路を明らかにして、将来の日本文化のよりよき創造のための知識を得ようとする主体的な関心にもとづいて要求」されていいるとする。日本文化史が取り組むべき課題として、①文化財の内容と特色の把握、②その社会的なない手を考える、③文化的伝統の形成、④海外文化との交流を掲げ、日本の文化の発達を歴史的なつながりでとらえることを主張する。

家永の文化史は一言でいえば、文化（文学や美術、宗教）は社会経済的な歴史の発展を反映しながら、近代へむかって発達していくというものでこの時代の歴史の見方の主流にある。その具体的な主張を先にかかげた西田直二郎の視点と比較するために、鎌倉時代に関する記述から引用してみよう。守護・地頭による国司、莊園領主の古代的支配権の侵蝕が加速度的に進んだ、承久の乱後の過渡的段階を説明した後、

そうした社会情勢は、この時代の文化史の上にそのまま反映している。民衆の成長につきあげられた武士勢力の上昇は、文化の世界でも、貴族社会では見ることのできなかつた民衆的要素の豊かな新しい文化をつぎつぎに生み出した。

そして、武士主従の契約的な結合という新しい社会関係は「日本人の精神的成长の上での画期的な進歩」といい、このような新しい人倫をおもな素材として『平家物語』に代表される軍記物という新しい芸能のジャンルをつくりだしたと説明される。この記述自体は、私たちにとってよく馴染んだものである。教科書をふくめて常識的な「文化は社会を反映する」という説明である。

林屋辰三郎は新しい文化史研究の道として、「文化をめぐる社会的基盤や階級的立場を通じて、文化創造にかか

わる人間精神についても充分な理解を持ち、戦後歴史学の研究成果をふまえ」つつ進むべきだとその方向を示し、研究方法として、時代の文化を考える際に、「最初から抽象的な時代精神を考えるのではなく、具体的な文化創造の過程についての検討を必要とする」と述べ、文化創造には、実際の製作者、経済的負担者、作品を享受するものの三者の連帯関係を重視すべきだと言い、中でも経済的負担者が文化の推進者、文化のない手であると強調する。^{*29}一九六〇年代には、このほかにも文化史論やシリーズが出されるが、歴史学にかぎらず、経済の高度成長を反映した「近代化論」、「日本文化論」が盛んに出版された。七〇年代、八〇年代にもその傾向は続き、主として海外（欧米やアジア）を意識した日本文化論が活発におこなわれた。

一方で、八〇年代に入ると先に述べた「社会史」の動きが日本でも活発になつてくる。日本における社会史は、フランスのアナール学派と必ずしも軌を一にするものではなく、網野善彦の牽引力が大きかつた。彼は自分を含む日本史研究の批判の上に独自な社会史を立ち上げさせていった。従来の日本史理解の常識を次々とくつがえして反省をせまり、反体制、反近代、歴史における進歩を否定するものとして、周辺領域にも強いインパクトをあたえた。この、歴史学という学問自体の歴史性を問う、越境するパワーをもつた「社会史」の登場は、これまでの「日本文化史」研究をかすんだものとしてしまった。社会史が、日本史における「日本」とは何かというような文化史の根本問題を提起したからであつた。

三、文化史の範疇

文化史はずつと日本史の一分野と考えられてきた。最も新しい『岩波講座 日本通史』（一九九六年完結）でも、

各巻の政治・経済を中心とする通史の後に「文化論」という章を設け、宗教、民俗、美術、文学、芸能などから時代³⁰ごとのトピックを選び配している。歴史の主軸はあくまでも政治・経済史であり、文化史を特殊部門とみる考え方で、『岩波講座日本歴史』が戦前・戦後を通じて一貫して堅持してきた編集方針である。

文化史を歴史の一分野の特殊史とする考え方たは、これまで検討してきた日本文化史研究のほとんどに共通するものである。文化研究の根本にかかわる問題なのでもう少しこれを検討してみよう。従来の日本文化史研究は、叙述の目的意識と文化の定義によつておよそ三つの類型に分けられるよう思う。

その①は、日本文化の特質は何かと問う（日本文化論型）。その②は、政治・経済を中心とする歴史に対して、宗教・思想・芸術など特殊史を総合的に叙述する（思想・芸術の特殊史型）。その③は、文化史こそ人間の総合的な歴史と考える（歴史イコール文化史型）である。

①と②、①と③は重なる場合がある。今まで見てきた日本文化史のほとんどが、①か②、あるいはその複合タイプである（芸術に力点が置かれたり、思想に力点があつたりする違いはあるが）。①と③の複合タイプは、わずかに西田直一郎『日本文化史序説』である。③の立場は和歌森太郎編『日本文化史学への提言』（本書は通史でなく論集）である。

この内、①は現在もよくおこなわれる日本文化論で、日本とは何かと問い合わせ文化史にその答えを求めるタイプで、内藤湖南『日本文化史研究』のように聞くべき論点を含むものもあるが、百人百様の議論である。日本文化の特質を探ることが本稿の主題ではないのでここではこれ以上言及しない。

文化史を日本史の一分野とみなす②の意見はつぎのようなものである。林屋辰三郎は、歴史は総体を明らかにし

なければならぬとし、「そのような歴史を一般史とすれば、文化史も政治史や経済史とともに一つの特殊史といふべきである。しかし、どのような特殊史であつても、たんに一つの特殊史として終わるのではなく、それを通じて一般史が把握されるべきもの」という。つづけて文化史は主流にはならなかつたが、「一般史のおちいりやすい政治史を中心とする傾向、あるいは文献的史料を偏重する傾向に対し、批判的意味をもつて生まれてきた」と述べる。^{*32}また、家永三郎も、文化を「学問や芸術や宗教や思想・道徳などの領域を指す言葉として使用する場合もあり、一般的には、文化といえばこの狭い意味につかわれるのがふつう」とし、自分の「日本文化史」もそのようなものであると述べる。そして「文化の中の様々な部門、学問や宗教や芸術さらに芸術ならば文芸と造形美術と音楽——またその中に、造形美術ならば絵画と彫刻と工芸といった部門があるわけだが——それがある範囲で自立的な動きをもつていて」^{*33}とし、それらすべてを総合した日本文化の歴史を描くのは難しいが、総合的に知りたいという要求に応えるべく、大局から把握してこの概説を書くという。つまり、これまで見てきたところの講座や代表的な日本文化史における「文化」は、能や花、美術や歌舞伎、仏教や「源氏物語」など狭い文化を指し、文化史は芸能史や文学史、美術史などの研究成果を総合することによつて成り立つと考えられてきた。

このような日本文化史の認識は、本稿の第一章で立てた問題意識とは明らかに異なつてゐる。私たちは、このようないくつかの個別史（専門領域）を積み重ねれば文化に至るという考え方と同調するわけにはいかない。また、「文化は発達する」という観点から語る歴史学、それを通史として叙述することに対しても疑問を呈せざるをえない。問題はむしろ、日本史の新しい研究や、海外の社会史、文化史研究が発するもろもろの問題提起を受けとめ、あらたな視点で日本文化史上のテーマ（事件や事象、事物や言葉、作品などの問題群）を選び出し分析することである。

四、日本文化史の課題と方法

日本列島の社会像、歴史像を見直すために提起された問題や視点とは、

- ①従来の日本史叙述におけるアイヌ・沖縄に対する視点の欠落 ②日本文化の特質を一元的に水田耕作に求めてきた見方に対する、異質な農耕の文化・民俗の存在を明らかにしようとする視点（坪井洋文の指摘^{*34}）、③北海道と沖縄に、本州・四国・九州とは別の「日本文化」が実在したとする考古学からの論（藤本強らの指摘^{*35}）、④古代以来日本が一つの国家だつたとする「单一民族國家」観を拒否し、日本列島上の人類社会史の観点にたつ主張（塚本学らの提起^{*36}）、⑤日本列島は海に隔てられ孤立した島国日本という常識を崩し、人と人を結び付ける交通路としての海の役割への注目^{*37}、そして⑥近代社会を支配した国家官僚と「学問」によって無視され圧殺されてきたもう一つの文化の発掘（山口昌男の一連の仕事^{*38}）、⑦「日本」とは何か、「日本」とはいわゆる律令国家が七世紀末ごろ対外的に用いた国号としてはじめて現れ、それ以前の列島には「日本」も「日本人」も存在しなかつたとする視点などである。

これから文化研究をおこなう者にとって、これらの問題提起を無視して通り過ぎることはできない。

文化をどのように問題にするか

私たちは過去どどのよう向き合い、接近にすればよいのか。

文化の研究にとって有効な一つの方法がある。ひとつは意味論的な検討であり、もうひとつは比較の方法である。

比較文化の方法については、次の機会に検討することにして、ここでは意味論的アプローチについて考えたい。

私たちは史料や作品、言葉や習俗を手がかりに、どのように「意味」に接近すべきなのだろう。大西廣・田中正之・林道郎の共同執筆による周到なエッセイ「美術史を読む」を導きの糸としながら考えてみよう。そのコラムのひとつ「解釈」は、次のように問い合わせる。^{*40}

ある作品を「解釈する」とはどういうことか。それは通常、作品の意味を抽出し、説明することだと考えられている。しかし、その抽出すべき「意味」は、いつたいどこにあるのだろう。美術史が長い間疑つてこなかつたのは、それが作品に「内在」するという態度であった。（中略）意味は作品の中に「閉じ込められている」ものだとする態度は、意味を「過去の産物」として実体化する。

これまで支配的だった二つの方法は、①「作品にこめられた作者の意図を再構成することを解釈の究極の目的とする方法」、つまり制作年代、様式、伝記的事実の「実証」の果てに「作者」が超越的な表現者として姿を現わす。作者という一点に収斂していく求心的な解釈であり、もう一つは②「時代」や「国」といった巨大な超越者にむかってゆく方法、地域様式や時代精神に還元する観念論だという。

たしかに、この解釈は、従来の日本文化史の叙述に多くみられる方法である。西田直一郎の『日本文化史序説』でも、個々の事象や作品の生成に通じる時代思潮をさぐり、時代の文化理念に還元するものであった。家永三郎の文化史も文化を社会経済史の反映とみる点で基本的に同じであった。

これら、一九世紀的な実証主義と觀念論に対し、ヴァールブルクやパノフスキイが提示したイコノロジー（図像学）の方法は、作者崇拜を否定し、時代精神への還元をも批判的に乗り越えようとした。作品の表象を分析しア

レゴリーや見つけ、描かれた個々のしぐさや持物の隠された意味を読み解く。しかし、「彼らの主張する意味の作品への『客観的内在』という考え方とは、やはり「内在」を前提としている点で自らを袋小路に追い込んでいる」と彼らはいう。

それでは意味を作品に外在するものと考えればいいのだろうか。そもそもいかない。そこで筆者たちは、「意味の起源がどこかに『閉じられた』ものとして考えるのではなく、むしろ解釈は『開かれた』もの」と捉えることが必要だという。ドイツ解釈学の伝統にあるデイルタイヤガダマーラが芸術作品の基礎においたのは、起源への遡行ではなく、「対話」だった。

彼らは作品の意味は、一方的に過去から放射されるのではなく、解釈者の置かれた現在との絶えざる対話の中から生成してくるものだという見方をとった。彼らは解釈そのものの歴史性を解釈の基盤に据えたといつてもいい。したがって、彼らにとって、過去の復元というのは欺瞞的な夢にすぎないのであって、作品の意味の探究という行為は、終りのない生産行為なのである。

そして、解釈の開放性という問題は記号論的な文脈さらにラディカルに追求された。記号学的な解釈では、解釈という行為の生産性＝意味の产出という側面が強調される。記号論的な解釈の手法の忠実さ、精細さは「作品によつて『意味されたもの』を抽出するためではなく、『意味するもの』としてのテクストそのものの構造を、そしてそこに働きかけている諸力の関係を読み解くためだ」という。

テクストそのものに働きかけている社会的諸力あるいは無意識の諸力の関係を読み解くことは、従来の日本の歴史学でも、美術史でも欠けていた方法である。古文書や文学作品（「貞永式目」や「平家物語」）のテクストにど

のような力がはたらき、それらが相互にいかなる作用を起こしているかを探る研究は、従来の歴史、文学研究の枠をこえて広い問題領域を開くことだろう。さらに、このような「解釈」についての反省をふまえて文化史が汲みとるべきものとして重要なのは、「事実という概念の見直し」である。

「事実」と「解釈」は従来、ふたつの違うレベルの問題だと考えられがちであつたが、じつは歴史の中の「事実」こそ、社会的な諸力の交錯の結果、つまり排除や選択や歪曲の結果、われわれに残されたものであるということ。かつ、それを編集するという作業がすでに「解釈」であるという認識をもつことが、硬直した実証主義からわれわれを救うだろう。また「解釈」が現在と深く関わる行為であるという自覚が、解釈の主体としてのわれわれ自身のイデオロギー上の反省を促すに違いない。

おわりに

日本文化史への意味論的アプローチは、多くのことを示唆する。そこにあると思つてきた「事実」が現在的な「解釈」と表裏の関係にあることをはつきりと意識化することで、事実を積み上げて叙述してきた従来の文化史のなかから、自明とされてきた事件や作品をもういちど問題化する機会が得られる。「意味」は時代や社会への還元によつてではなく、現在との絶えざる「対話」のなかに浮かび上がつてくる。あたらしい歴史学は、問いかける「文化史」によつて担われる。そこでは「日本」が不確定な概念として現れるはずだ。

あたらしい歴史学のラディカルな問題提起は、「専門」にしばられない研究者・出版編集者・批評家・読者によつて共有されなければならない。

注

- * 1 拙稿「『鎌倉新仏教』という名辞について」『鎌倉仏教の研究——高木豊先生古希記念論文集』(仮題) (一九九八年刊行予定)。本稿では、日本仏教史という学問の成立と展開過程にかかわり、「鎌倉新仏教」という言葉がいつころ出現し、概念として確立していくかを検討。法然、親鸞、栄西、道元、日蓮らの唱えた個々の「教え」が鎌倉新仏教としてまとめて記述され、「仏教の民衆化」や「日本化」と価値づけられ、西欧の宗教改革に比されるといった「言説」が通説化し、歴史教科書にも定着していく過程が日本仏教史という学問の成立に深くかかわり合うことをみた。
- * 2 大西廣「瓢鮎図と瓢箪の呪術性」『瓜と龍蛇』所収(一九八九年、福音館書店)
- * 3 東京国立文化財研究所主催『第21回 文化財保存に関する国際研究集会』「今、日本の美術史学を振りかえる」一九九七年一二月三・四・五日於:東京国立近代美術館。このシンポジウムの記録は出版刊行される予定である。
- * 4 北沢憲昭「日本美術史の枠組について」(*3の発表論題)。同『眼の神殿——美術受容ノート』(一九八九年、美術出版社)参照。
- * 5 高木博志「日本近代の文化財保護行政と美術史の成立」(*3の発表論題)。同『近代天皇制の文化史的研究——天皇就任儀礼・年中行事・文化財』(一九九七年、校倉書房)参照。高木を含む第一セッションの報告では、九鬼隆一によつて最終的にまとめられた『稿本日本帝国美術略史』(一九〇一年)をめぐる議論が注目された。
- * 6 岡田健「龍門石窟への足跡——岡倉天心と大村西崖」、佐藤道信「世界観の再編と歴史観の再編」、宮崎法子「近代日本のなかの中国画研究」(三者とも*3の発表論題)、佐藤道信「『日本美術』誕生——近代日本のことばと戦略』(一九九六年、講談社)参照。
- * 7 山口昌男「近代日本における画家のアイデンティティ——美術と非美術の境界の諸問題」、ジョシュア・S・モストウ「日本美術における『みやび』」、玉蟲敏子「日本美術の装飾性という言説」、木下直之「日本美術のはじまり」(以上、*3の発表論題)、木下直之『美術という見世物』(一九九三年、平凡社)参照。
- * 8 アナール学派については、ジャック・ルゴフほか著、二宮宏之編訳『歴史・文化・表象』(一九九二年、岩波書店)が理解

を深める最良の書である。本書にはG・デュビー、J・ルゴフ、E・ルロワ＝ラデュリー、A・ビュルギエール、R・シャルチエの歴史に関する論が集められている。M・フーコー『言葉と物——人文科学の考古学』（一九七四年邦訳、新潮社）、同『監獄の誕生』（一九七七年邦訳、新潮社）など。

*⁹ ナタリー・Z・デーヴィス『マルタン・ゲールの帰還』（一九八五年、平凡社）、同『愚者の王国 異端の都市——近代初期フランスの民衆文化』（一九八七年、平凡社）。

*¹⁰ A・グレーヴィチ『中世文化のカテゴリー』（一九九二年、岩波書店）。

*¹¹ E・P・トムソンの邦訳本はまだない。E.P.Thompson, *The Making of the English Working Class*(New York, 一九六二) リン・ハント編『文化の新しい歴史学』（一九九三年、岩波書店）参照。

*¹² *⁸『歴史 文化 表象』の付論「鼎談 社会史を考える」（柴田三千雄・渥塚忠躬・二宮宏之）での二宮の発言。

*¹³ R・シャルチエ『表象としての世界』(*⁸前掲書所収)

*¹⁴ G・デュビー「歴史認識における座標軸の転換」(*⁸前掲書所収)。同『ブーヴィーヌの戦い——中世フランスの事件と伝説』（一九九二年、平凡社）参照。

*¹⁵ J・ルゴフ「歴史学と民族学の現在——歴史学はどうへ行くか」(*⁸前掲書所収)。同『煉獄の誕生』（一九八八年、法政大学出版局）参照。

*¹⁶ 対談「〈混淆〉の戦略を求めて」山口昌男+N・Z・デーヴィス『ユリイカ』（一九九七年一月号、青土社）

*¹⁷ 綱野善彦『無縁・公界・樂——日本中世の自由と平和』（一九七八年、平凡社）、笠松宏至『法と言葉の中世史』（一九八四年、平凡社）、綱野善彦・笠松宏至・勝俣鎮夫・佐藤進一編『ことばの文化史』四冊（一九八九年、平凡社）など。

*¹⁸ 石井進・綱野善彦・福田豊彦編『よみがえる中世』全一〇巻のうち八冊（一九八八～九五年、平凡社）。石井進ほか編『考古学と中世史研究』シンポジウム報告集全6冊のうち『中世都市と商人職人』など（一九九〇～九七年、名著出版）。

*¹⁹ 黒田日出男『姿としぐさの中世史——絵画と絵巻の風景から』（一九八六年、平凡社）。本書をふくむシリーズ「イメージ・リーディング叢書」は、素材としての美術作品を歴史・民俗・文学などの視点から読み解く企画として注目された。その他、五味文彦『中世のことばと絵』（一九九〇年、中公新書）、瀬田勝哉『洛中洛外の群像 失われた中世京都』（一九九四年、平凡社）など。

- * 20 綱野善彦・大西廣・佐竹昭広編「いまは昔 むかしは今」全五巻のうち『瓜と龍蛇』ほか四冊（一九八九年）、福音館書店）。
- * 21 阿部謹也・川田順造・二宮宏之・良知力編集同人『社会史研究』（一九八一年創刊、八八年休刊）、綱野善彦・塚本学・坪井洋文・宮田登編『列島の文化史』（一九八四年創刊）、両誌とも日本エディタースクール出版部刊。
- * 22 朝尾直弘・綱野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史』全八巻（一九八七年、岩波書店）
- * 23 綱野善彦は、文献史学が戦後ずっと日本文化論や日本論に対し批判的、消極的だつたという。「七〇年代には、天皇を研究のテーマとして取り上げること自体、その延命に力を貸すものとして頭から斥ける見方、論者を問わず『日本文化論』はそれ自体、批判すべき対象とする姿勢、さらに文化人類学・民俗学を超歴史的として拒否する傾向が歴史学には支配的」だつたと述べる。「日本列島とその周辺——『日本論』の現在」『岩波講座 日本通史』第一巻所収（一九九三年）。
- * 24 生松敬三「『文化』の概念の哲学史」『岩波講座 哲学』13「文化」（一九六八年、岩波書店）
- * 25 『日本文化大観』上巻は、B4判四〇〇ページという大型本で、コロタイプのモノクロ別刷五八ページを付す豪華本である。筆者は不明だが、戦前の文化史の水準を示す集大成版といえるだろう。
- * 26 遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』（一九六八年、岩波書店）
- * 27 林屋辰三郎『日本 歴史と文化』（一九六六・六七年、平凡社、『日本史論聚』オ一巻再録、一九八八年、岩波書店）
- * 28 熊倉功夫『伝統芸能研究の方法』 和歌森太郎編『日本文化史学への提言』所収（一九七五年、弘文堂）
- * 29 前掲*27
- * 30 拙稿「戦後出版史の一観角——岩波講座『日本歴史』の検証」日本出版学会編『出版研究』27所収（一九九七年、出版ニュース社）。『岩波講座日本歴史』は、戦前、戦後にわたり四度刊行されている。四期とも編集形式の基本に大きな変化はなく、時代を論じる各巻の構成を見ると、政治、経済、社会、文化の順に論文を配する。日本史学の主流が文化史をどのように見てきたのかがわかる。
- * 31 和歌森太郎編『日本文化史学への提言』（一九七五年、弘文堂）。和歌森は、同書の「文化史学の課題と方法」で、文化史とは人間史であり、政治史・経済史……を包括する概念だという。また従来の文化史が性急に文化理念、各時代における文化価値規範を求めたことを批判する。
- * 32 前掲*27

* 家永三郎『日本文化史』（一九五九年初版、八二年第二版、岩波書店）

* 坪井洋文『イモと日本人』（一九七九年、未来社）、同『稲を選んだ日本人』（一九八一年、未来社）参照。

* 藤本強『もう二つの日本文化』（一九八八年、東京大学出版会）

* 塚本学「日本史は特異なのか」『歴史学研究月報』（一九八〇年、歴史学研究会）

* 綱野善彦・大林太良・谷川健一・宮田登・森浩一編『海と列島文化』全一一卷（一九九〇～九三、小学館）

* 山口昌男『「挫折」の昭和史』同『「敗者」の精神史』（一九九五年、岩波書店）

* 綱野善彦前掲*23ほか

* 林道郎・田中正之・大西廣共同執筆「美術史を読む」『BT（美術手帖）』（一九九六年一月号～六月号、美術出版社）。キイ・

ワード7「解釈」は、オ四回「マイケル・フリード——批評と歴史」に収載。本項は田中・林執筆。